

## この一年を振り返る

### <『平家物語』を読む会> 村山 功一

平成28年度は〔巻十〕「海道下（かいどうくんだり）」から始まりました。かつては牡丹の花にたとえられた美貌の貴公子、加えて平家一門にあってはきっての武将である重衡は、一の谷の合戦で唯一生け捕りにされた。その重衡が鎌倉に護送される道中を描いたこの章段は、古来名文と評され、格調高い平安美文調で描かれた本文をじっくりと鑑賞しました。

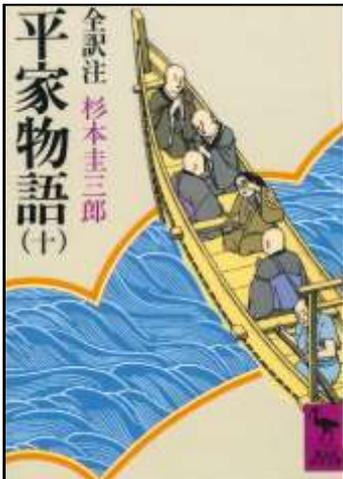
続いて、「横笛」「高野巻」「維盛出家」「熊野参詣」「維盛入水」という一連の“維盛物語”を読みました。一門の将来を悲観した維盛は、屋島を脱出し出家を志し高野山の滝口入道（元は父重盛に仕えた齊藤滝口時頼）を尋ねる。「横笛」は、時頼と彼を慕う横笛の悲恋を語る章段。このかなり長い“維盛物語”は、入水の直前まで迷い、葛藤する維盛の苦悩、それは、時に優柔不断な維盛像を描き出しているのですが、その根底にはどうしても断ち切ることの出来ない妻子への深い想いが切々と語られ、心を打つ内容でした。

維盛は平家嫡流の家柄、小松家の当主です。しかし、大將軍として出陣した富士川の合戦では、水鳥の羽音に驚き都に逃げ帰り祖父清盛を激怒させ（巻五「富士川」）、木曾義仲を討つべく出撃した倶利伽羅峠の合戦（巻七「倶利伽羅落」）でもあえなく敗退した“弱将”として描かれる人物です。それにもかかわらず、なぜ“維盛物語”と呼べるほどに纏まった一連の章段がもうけられたのか、かなり長い時間をかけてその原因を探ってみたりしました。

12月からはいよいよ〔巻十一〕に入ります。この巻は文字通り合戦に次ぐ合戦という内容で、まさに“軍記物語”としての『平家』の本領発揮というところですか。有名な那須与一の「扇の的」や義経の八艘跳び、弓流しなどの戦場エピソードを経て、運命の壇の浦へと進んでいきます。ここでも、できるかぎり史実に触れていくつもりです。

さて、今年の“黒滝レポートは、すでに本紙82号（9月1日発行）に詳しく載せていますが、恒例の黒滝千織さんの“京都レポート”は、過去7回の総まとめとして各回ごとの映像を見ながら思い出やエピソード、取材旅行の裏話などで盛り上がりました。さらに研究のため黒滝さんと同行した京都薬科大学教授鈴木栄樹先生（日本近代史）より、北海道の開拓時代と京都のつながりを中心に「北垣国道から見た京都と北海道」題した興味深いお話を伺うことができました。鈴木先生は北垣国道（第三代京都府知事・第四代北海道長官）が遺した日記『塵海（じんかい）』の研究者（おもに解説）として知られている方です。こうした現役の研究者の方から直接お話を伺う機会を得たことは、たいへん貴重な経験でした。

こうして振り返ってみると、なかなか充実した一年であったように感じています。新年度も会員の皆さんの真摯な受講姿勢と、湧学館の方々のご協力に支えられつつがんばって進めていきたいと思っております。よろしく願いいたします。



京極読書新聞は  
毎月1日発行予定です



平成28年度活動状況

- 4/ 1 (金) [巻十] 「海道下」③
- 4/15 (金) [巻十] 「千手前」①
- 5/ 6 (金) [巻十] 「千手前」②
- 5/20 (金) [巻十] 「横笛」①
- 6/ 3 (金) [巻十] 「横笛」②
- 6/17 (金) [巻十] 「横笛」③
- 7/ 1 (金) [巻十] 「維盛出家」①
- 7/15 (金) [巻十] 「維盛出家」②
- 8/ 5 (金) [巻十] 「熊野参詣」①
- 8/19 (金) 「黒滝千織・京都レポート」★行事  
第一部<『平家物語』を読む会と私>黒滝千織さん  
第二部「北垣国道を通して見た京都と北海道」  
京都薬科大学 鈴木栄樹教授
- 9/16 (金) [巻十] 「熊野参詣」② ※日程変更
- 9/23 (金) [巻十] 「維盛入水」
- 10/ 7 (金) [巻十] 「三日平氏」①
- 10/21 (金) [巻十] 「三日平氏」②
- 11/ 4 (金) [巻十] 「藤戸」①
- 11/18 (金) [巻十] 「藤戸」②
- 12/ 2 (金) [巻十一] 「大嘗会の沙汰」
- 12/16 (金) [巻十一] 「逆櫓」①
- 1/ 6 (金) [巻十一] 「逆櫓」②
- 1/20 (金) [巻十一] 「逆櫓」③
- 2/ 3 (金) [巻十一] 「勝浦 付 大阪越」①
- 2/17 (金) [巻十一] 「勝浦 付 大阪越」②
- 3/ 3 (金) [巻十一] 「勝浦 付 大阪越」③
- 3/17 (金) [巻十一] 「嗣信最期」①

予定

「維新出家」①

神聖な高野山奥の院に詣でた維盛は、出家の決意を固める。二人の従者を召して「自分の行く末を見届けた後は都へ上り、生命を全うせよ」と命じる。二人はこの命に従わず、維盛に先立って出家を遂げてしまう。

「三日平氏」①

舎人（とねり）武里は三人の入水を見て自分も後を追おうとするが、滝口入道の強い説得で断念。尾島に渡り入水の子細と維盛の遺言を伝えると、門下の人々は皆、涙を流した。5月、頼盛が関東に下る。頼盛の忠臣、宗清は動向を拒否し、頼盛の下向も留めようとする。

「大嘗会の沙汰」

寿永二(1184)年10月、寂しい屋島とは裏腹に、都では新帝即位に伴う大嘗会の儀式が行われた。戦乱で疲弊して国難な中、儀式は盛大に挙行された。一方西国では、範頼以下三万の源氏軍は平家を続けて攻めることもせず、遊興にふけり無為の日を送りその年も暮れていった。



# 湧学館 「製本教室」の十年

湧学館司書 新谷 保人

近隣の図書館ではあまり聞いたことがない、湧学館独特の仕事として「製本教室」と「本の病院」があげられます。毎日、壊れた本を修理したり、読書会で読んだ作品を一冊にまとめて湧学館オリジナル本をつくったりと、なんか器用な図書館だなあと思う人もいるかもしれませんが、じつはこれ、同じ一つの仕事なのです。本の造りをしっかり学べば、造りの壊れた部分を直すことも、造りに沿って本の形に仕上げに行くことも、なんでもできるようになります。そんな湧学館の十年を、「製本教室」が生み出した作品群をたどって紹介してみましよう。

## 1. 「折り本」時代

(平成19～21年度)

- 「平家物語 巻一」
- 「東俱知安線建設概要」
- 石川啄木「忘れがたき人人」

本一冊作るのに一週間みてくれば大丈夫といった現在の湧学館から見れば、十年前の製本技術はおよそ初歩的なレベルに低迷していた図書館でした。製本作業にはつきものの「糸綴じ」技術が苦手で、もっばら「糸綴じ」を必要としない「折り本」作品ばかりつくっていたことを懐かしく思い出します。

当時の製本教室講師には、小樽市立図書館の製本ボランティアで活躍されていた北間正義氏をお願いしていました。北間先生からは、もっともっと面白い本作りがあるんだからどんどんチャレンジして行こう！と発破をかけられるのですが、なにか「折り本」段階で自己満足していたような時代でした。私たちが「糸綴じ」を怖れなくなるのはこの次の時代。読書会活動が始まって、私たちの中に「つくりたい！」という気持ちが爆発的に溢れてきてからです。

## 2. 「糸綴じ本」時代

(平成22～23年度)

- 「春蘭 峯崎ひさみ短編集」
- コデックス装「平家物語」巻三～巻五
- 「約束 峯崎ひさみ作品集」

平成22年は京極町出身の作家・峯崎ひさみさんとの出会いの年。一冊の本『穴はずれ』との出会いは、たしかに湧学館の有り様を変えました。みんなにこの本を読んでほしい！ そのためには湧学館の本棚に峯崎さんの本が並んでいることが必要だ。じゃあ、本をつくろう！と、どんどん湧学館の製本技術は向上していったのでした。

北間先生の講師時代は平成23年度で終了。平成24年からの講師は新谷がつとめるようになります。平成23年度最後の作品は峯崎ひさみさんの『約束』でした。収録作品の決定からフォント実験・装丁・表紙デザインまで、すべてを自分の責任で一冊の本をつくり終えたことは今後の大きな自信となりました。



## 3. 「オリジナル本」時代

(平成24～26年度)

- 「約束 峯崎ひさみ作品集」(ソフト装)
- 湧学館編「胆振線作品集」
- 沼田流人「血の呻き」(完全復刻)
- 北海道新聞郷土版  
2004年11月～2008年12月

峯崎さんの雑誌発表作品(単行本未収録)を集めた『約束』は、もうひとつ私たちに「オリジナル」であることの価値を教えてくれたように思います。私たちは、本をつくる時、技術的にできないを考えるだけでなく、つくろうとしている本の資料的価値とか意義とかオリジナリティがあるかないかも考えるようになりました。

テーマの発掘も重要です。『穴はずれ』を読むと、そこから「錦」「脇方」「胆振線」「戦後開拓」「樺太」といったキーワードがいっぱい湧いてきて、そのキーワードのひとつひとつが次なる畔柳二美や大森光章の作品につながって行きます。みんなに読んでもらわなければならない、製本しなければならない作品がどんどん増えていって、湧学館の読書ワールドを大きく形成するまでになりました。

ちなみに、平成25年度の製本教室では、例年の製本作業を一度お休みして、今までつくってきた読書会テキスト約40タイトルのリクエスト復刊を受けつけるという試みを行っています。これは北海道新聞・小樽後志欄でとりあげられたこともあり大きな反響を呼び、京極以外の町村からたくさんのリクエストが湧学館に寄せられました。つくった冊数、じつに412冊というもの凄さです。こんなに山麓の人々の需要があるのに、どうして図書館はこの声に応える存在ではないのかと不思議な気分にもなりました。

## 4. 「京極文芸」時代

(平成27～28年度)

- 「針山和美作品集」(全10巻)
- 「石橋孝弘詩集」(正統)
- 「京極文芸」全15冊 拡大復刻版
- 阿部信一「屠殺」

去年から今年にかけては、約40年前に京極町で発行されていた同人雑誌『京極文芸』の復刻作業に没頭しました。この試み、長年の懸案事項ではあったのですが、主に労力の関係で作業に着手することができませんでした。ついにその作業を始めることができた背景には、製本技術の向上といった単純な理由ではすまされない何かがあります。

おそらく、図書館としての湧学館が最初の完成段階に入ったということが大きな原動力ではないでしょうか。湧学館の誕生から十年。蔵書数7万冊。広域利用があり、学校への出前図書館があり、読書会活動があり、そして「京極文芸」という町民文化遺産の実体化があり…といった第一次湧学館スタイルの完成が、次なる時代の湧学館を生み出す母体となって行くことでしょう。



## 発行

京極町生涯学習センター湧学館  
〒044-0101 京極町字京極158番地1  
TEL 0136-42-2700(代表)  
FAX 0136-42-2032  
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください  
<http://lib-kyogoku.jp>

